

ベスト・セラーを論ず '96上期

出席者

評論家

小浜逸郎

明治学院大学国際学部教授

竹田青嗣

東京工業大学工学部教授

橋爪大三郎

知の意匠をまとつた

「技法の書」ばかり

小浜 96年上期ベストセラーといえ
ば、『脳内革命』と『超』勉強法』の
二冊が挙げられます。この二冊が内容
的に共通しているのは、身体や知的能
力といった個人の関心事に的を絞り、
ポスト・オウムというか、オウム真理
教事件以降のちよつと元気をなくして
いる日本人に、「あなたも今日から変
われる」というメッセージをダイレク
トに投げかけている点です。多分それ
が受けている理由の一つでしょうね。

橋爪 確かに『脳内革命』と『超』
勉強法』は、似ていますね。
まず、オウム真理教事件や、経済の
停滞で、現状はどうもおかしいとみん
なが思っている。そこで手近なところ
に原因が欲しい。『超』勉強法』は、
「それは勉強の方法が悪かったからだ」
と言い、『脳内革命』は、「それは考え
方が前向きでないからだ」と言ってく
れる。読者は、「そうか、勉強法を変
えれば、なんとかなるかもしれない。

考え方を変えれば、幸せに生きられる
かもしれない」と。そういうことがま
ず共通している。
**セックスとエロスが
下部構造になった**
小浜 章ごとのまとめがあったり、テ
クニツク的に商売上手なことをいろい
ろ用いているってことも共通していま

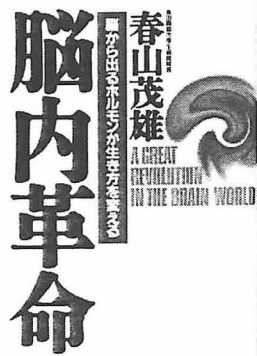
すね。内容的に考えて、どちらの本も
落ち着いて読むと、そんなに意表をつ
くことを言っている感じはしない。

『超』勉強法』のほうは、「八割で
いい」とか、「英語は暗記だ」とか。
『脳内革命』も、要するに緑黄色野菜
をとって、脳内ホルヒネをたくさん出
すためにプラス思考でいけ、という話
ですよね。この手の本では割と言われ
てきたことで、それほど革命的なこと
を言っているわけではないけど、それ
が「新発売」というイメージが出るよ
う、工夫がされていますね。

橋爪 そうですね。この二冊の特徴は
それが「科学的」だということですね。
それは必ずしも、アカデミックという

意味ではない。たとえば「脳内ホルヒ
ネ」という用語が出てくる。これを読
むと、「考え方を変えるだけで、脳内
ホルヒネという科学物質が出て、免疫
も強化され、慢性病が治る」。『超』
勉強法』も、精神主義ではなく、あく
まで方法です。そういう意味で、科学
的なわけですね。

また、執筆者がそれを実践に実践し
ている、という点も共通点として挙げ
られます。野口さんはそれを実践して、
現在のお仕事をされているし、春山さ
んも多くの患者さんにいい効果を上げ
ている。そういうことも、これらの本
の信頼性につながっている。
そういう科学的な裏付けと、リーダ



春山茂雄著
『脳内革命』
サンマーク出版 1600円
240万部



野口悠紀雄著
『超』勉強法』
講談社 1500円
130万部

ーシップを持っている実践者・著者へ
の信頼、そして割と手軽に、ちよつと
発想を変え、方法を変えることで自分
を救い出したいという願望と、そんな
ものが結びついて、多くの読者を得て
いるという気がします。
小浜 そういう意味では、二冊とも大
衆性の秘密がよくわかる本ですね。
橋爪 わかりやすいですね。ま、売れ
たから言えることですけど(笑)。
竹田 いまお話を聞きながら、じつと
この二冊をにらんでると、これまでど
んなベストセラーがあったのか、少し
気になりますね。つまり、二〇年ぐら
い前まではやはり経済が下部構造だ
という観念があった。しかしいまは、
「セックス」と「エロス」が下部構造
だなという感じを持ちました。
80年代以降のポストモダンの流れで
出てきたいくつかの文脈の一つに、身
体性の内側に眼を向ける、というのが
あった。中沢新一が『チベットのもー

患者よ、
がんと闘うな

近藤誠

近藤誠著
『患者よ、がんと闘うな』
文藝春秋 1400円
26万5000部

『脳内革命』はそれの俗流版だという感じはわかる。ほくも率直に言うところ、これは「なるほど、これはためになる」と思うところがたくさんあります(笑)。しかし一方で、ほんとかウンかわからない、ということもある。

かつては衣食住が下部構造で、ほかのことは排しても、そのために人間は行為していた。それがいまや、経済、つまりおカネを稼ぐためではなく、む

しろ社会の中で、自分のエロスやセックスを上手に得るためにどうすればいいか、それが下部構造になっている。小浜 セックスとエロスが下部構造だとすると、東洋経済も発想を変えなくちゃいけない(笑)。竹田さんの話の下部構造は、エロス、セックスとも言えるんだけど、「パワー」ということも言えますね。「時代が読めない」という不安、生きてることの不安に対してどう立ち向かうのか。そのよりどころ、つまり「寄らば大樹」の大樹が折れてしまい、個人の側には、いかにして神通力を見いだすかという潜在的な欲求があり、それに対してうまく応えている。しかし、パワーに頼ることの時代的な必然性を認識しつつ、一方ではそのことのいかかわしは何か、しっかりと見ておくべきでしょうね。

橋爪 私もそう感じたので、敷衍してつけ加えますと、両方とも「癒し」という要素がある。『超』勉強法』の場

合、いままでのダメな勉強法でさんざん痛めつけられて、十年も英語勉強して全然しゃべれないじゃないかという感覚があるし、『脳内革命』は、西洋医学へのアンチテーゼとして出てきている部分がある。ガンだといえぱすぐ切られ、薬漬けになって、しかも病気が治らない、どうしてくれるんだという苛立ちがあつて、それを癒していくという要素がある。

どちらも癒しではあるが、中心が空洞で、脱イデオロギー的です。『超』勉強法』は、勉強の方法については述べているけれど、何を勉強するかについては全くニュートラルですね。これ、70年代までだったら考えられないことです。『脳内革命』もそうで、これは極言すれば、脳内ホルヒネを出すものであれば、新興宗教だつていい話になるんですよ。

そういう意味では、大変なニヒリズムなんですけれども、そういう本が圧

倒的な反響を呼ぶということが、つらい、厳しいところだな、という気がしますね。

竹田 癒しまで行けばまだいいけど、癒しに行くまでの「技法」でとどまるところがある。なんとなく科学的な論拠をつけて、だけど言っていることは非常に単純なこと。それはけつして悪いことではないが、しかし、それは基本的には技法、処方箋です。それ以上の癒しや、そこに行く道筋はあるか

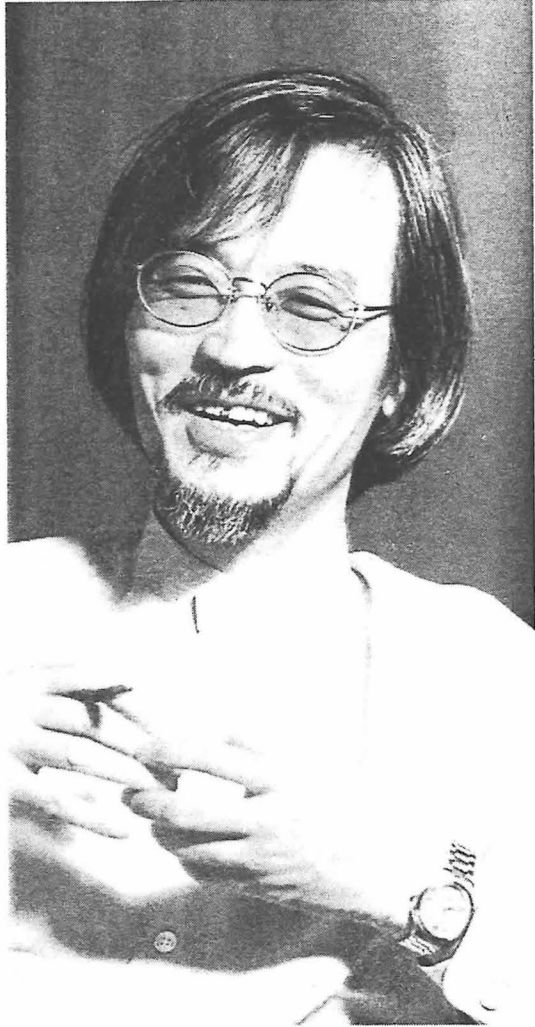
というと、ここにはないわけです。

最近よく、例外的に一冊だけベストセラーを読んで、それは近藤誠さんの『患者よ、がんと闘うな』という本です。これはなかなか面白く読みました。論旨は、がんには手術はほとんど効かない。抗ガン剤も、一部を除いて効かないことがはっきりしている。けれども病院は手術や抗ガン剤の投与を続けている。なぜかという、一言で言えば、それはいまの医療体制のシス

テムの問題だ、ということですね。

近藤さんの書き方がいいと思うのは、システム全体の問題に及んでいるところなんです。医学的なデータを出しながら、心身の問題も説いているところは、『脳内革命』とも少し通じるけど、『患者よ、がんと闘うな』には行き着く先があると感じる。だけど、『超』勉強法』と『脳内革命』には行き着く先がどこにも見えない。ほく、この対照が少し気になっています。

小浜 それに絡んで、『脳内革命』で気になったのは、あっさり「みんながプラス思考になれば必ず、共同性にとってよいことになる。みんな利他主義になれる」と簡単に結論付けているところですね。単なる個人の抽象的なパワーであれば、絶対にそこには原理的につながらない。それを考えず、ある意味で飛び越している。それが一番気にかかったことです。



こはま いつお



ヨースタイン・ゴルドル著
須田朗監修・池田香代子訳
『ソフィーの世界』日本放送出版協会 2500円 168万部

て、自分の不安や何かを乗り越えようという発想が、いかにして共同性を生きた人間というテーマにつながり得るのか、ここをきちっと押さえないと、思想や本としての価値に疑問を感じてしまうわけです。

楽観視できぬ

「知的なあこがれ」

小浜 最近話題になった本の中でよくは、『ソフィーの世界』と『知の技法』と『恢復する家族』の三冊に対して、ある感情を持っています。この三冊は、読むのにたいへんな知的努力を要する

本で、何十万という読者層が完全にのみ砕いて読みこなせる本ではないと思われれます。

日本は識字率も高く、読み書き能力はおそらく他の先進諸国に比べても高いと思いますが、そういう知的能力のものを、素直に喜んでよいのか、疑問に思うわけです。自分たちの具体的な生に対して意識が遊離し、いかにして地に足をつけて生きていくかがわからず、抽象的な知へのあこがれを抱いている階層が多く生み出されている。そういう知的大衆の、ある浮き上がった部分が、この三冊に吸い寄せられている、と言えるかもしれません。

一般に、どういう本が売れるかというところで時代を占う場合には、何部売れたかで話が終わり、そこから先には行かない。その中の何人の人がじつさいにその本を読み、その人たちがそこから何を得ているのかという追跡

調査は、出てこないですね。しかし、売れているが読まれていないというギャップは、もしかすると問題に十分な足りることはないか。つまり、売れていることを一つのポジティブな判断材料にするのではなく、むしろ売れていることの中に問題を見るところに発想が必要ですね。とくにこの三冊に關してはそういうことを感じます。

竹田 ぼくは『ソフィーの世界』それ自体については、あまりけなすつもりはなくて、いま小浜さんがあげた三冊の中でも、これに一番好意的です。今回、この本を取り上げるといって、学生にアンケートをとりました。二七〇人中、買ったという人が二五〇二人。最後まで読んだ人は六〇七人。ほかの人にも聞いた感触では、最後まで読んだ人は、半分以下ではないかな。

では、なぜこの本が売れたのか。やはり、ちょっと哲学を読んでみよう

ということかな。ではなぜ哲学に気持ちが向いているのか。それについては、少し考えてみる必要があります。

かつては、社会がよくなればすべてよくなる、という感覚があった。つまり、人間にとってこの世を超えたなにか「素敵」なもの、つまり超越項という側面で、社会は非常に大きな概念でしたが、ここ一〇年ぐらいのうちに、社会という項目は超越項ではなくなり、「脅かし」になったといえます。

いままでは、もし社会が変われば素敵だと考えていた。しかしいまは、日本人が豊かになり、ほかの国々が相対的に貧しくなって、差別の問題や、第三世界の問題や環境問題を考えていくと、必ずどこかで「自分は先進国である日本でのうのと暮らしてよいのか」という感覚が入り込んでくる。社会のことを考えることによって、生きていることのストレスや不安感が消えなくなっているわけです。

それではどういう方向があるかといえば、身体性に向かう、それから神秘性に向かう、それから呪術性に向かう、それから哲学に向かう。哲学は多くのフィールドなので、商売上言えば、『ソフィーの世界』がたたくさん読まれるのは、それほど悪くない話ですが(笑)、楽観視はできないですね。

中身の話でいくと、この本で中心になるのは、バークレー的な問題。つまり、自分たちの自由とか、生きる根拠を、もつとも根本的に支えているものは何だろうか、という問いです。それをどういう形で与えているかという問い、人間は、死というものに限定されて生きていて、その一方では永遠というものにあこがれている、そういう存在だということがだんだんわかってくるのですが、そのわかり方のインパクトがあまり強くない。哲学とは一体何なのか、これを読んでじわっとわかってくるかというと、それも弱い。



たけだ せいじ



はしづめ だいさぶろう

するとやはり「ちょっと知的なもの」に対するあこがれによって読まれているのかなというのが、ぼくの推理ですね。そうすると簡単に喜んでいられない、という先ほどの話に戻る。

橋爪 この本の特徴をあげれば、『知の技法』とも共通しますが、教養教育の先生が、教えるという現場の中から生み出した本だという点です。年若い読者に知の全体を知らしめるのが彼らの職務で、しかもこの一冊で知のすべてを要約する、という制約がある。確かによくできていますが、これはミニチュアワールドだなという印象ですね。本物のおもかげをとどめていて、しかし小さくて、すぐに一巡できるということですね。

もし本物を回ろうとすれば、それはすべての哲学書を読むことに相当する、大変なことです。この本はミニチュアですから、少なくともある体験ができる。なぜそういう本が必要か。そ

くように見えるけど、この本にはアジアの字も日本の字も出てこない。この本の系統樹をたどることによって、果たして、自分の人生がそういう過去の深みを持っていたのだと理解できる構造になっているかと考えると、たいへん不思議な感じがする。これが一六八万部(96年7月現在)も売れていることも非常に理解しにくくなる(笑)。小浜 誰かが書評で書いてましたが、この本と対になる形で東洋哲学の解説

小浜の推薦図書

森岡正博著『宗教なき時代を生きるために』(法蔵館)。この人はオウム真理教の幹部と同世代で、オウム事件をわがことのように受けとめ、宗教にも入れず、科学信仰にも入れない、そういう心の状態を持った人はどうすればいいのかという問題意識で、誠実に自分の立場を見つめています。三〇代の人たちがものを悩んでしまったときの解決の難しさは、よく照らし出されて

人生の価値について
西尾幹二



新潮選書

いる。そういう意味で、推薦しておきます。必ずしもぼくは、彼の考え方には賛成しません。乱暴な言い方をすれば、大江健三郎的な倫理主義と通じるものを感じてしまいます。

それから、西尾幹二著『人生の価値について』(新潮選書)。天下国家の問題から日常性の問題まで語っていて、枠がないだけにかえって面白い。文明論の材料としても、ニーチェ、シヨールペンハウアーから中国の韓非子、孔子まで、洋の東西にわたって自在に自由に論じている。人間の弱さとか、もつと広がって、日本の置かれている位置の厳しさということも出てきて、ためになると思います。

の裏に、本物を読むのは専門家にとっても大変で、いや、専門家だからこそ、ぐるっと回るのはほとんど不可能になっているぐらい、知の世界が混乱して拡散している。この本はそれに対する一つの解答ですね。

が出てきてほしいという話がありましたね。

橋爪 それは難しいでしょう。東洋の知はこういう系譜的には組み立てられていないから。

面白主義が 教養を蝕む

橋爪 『知の技法』の編者は、ぼく、

面識のある人もいるんですけど、おおもね団塊の世代ですね。彼らは最初、知の破壊者として現れ、大学のアカデミズムに反対し、大学は解体だと言っていた。それから数十年経って、知に対して責任を持つ立場になり、知を再建しなければならなくなった。しかし、元通りに再建するわけにはいかないのに、工夫が要るわけですね。

ポストモダンには、脱イデオロギー、相対主義ですから、特定の知識の体系に価値があるとか、どちらが正しくてどちらが間違っているとは言わない。すると、どんなに細かい問題も、どんな大問題も等価になり、教養の体系が成り立たなくなる。彼らはそれを再組織するのに、少し時間がかかったと思うんです。

これが受けている理由のひとつには、授業は面白くなければならないというこの本のスタンスがあるように思われます。

知の技法



小林康夫／船曳建夫編
『知の技法』
東京大学出版会 1545円
42万部

かつてと違い、授業がわからなかつたら教師が悪いという考え方があつて、学生に知を届かせる技術を持つていなければ、教養の教師は成り立たなくなっている。そういうことで、この本はまず大学関係者が買い、ほかの人たちに広がっていったという構図がある。そのこと自体は、時代の流れでしょうが、では学生に受ければ、それで問題が解決というわけではない。

本来であれば、ある体系ができ上がって、それを要約するかたちになるはずですが、そうはなっていない。小浜 ぼくは、この本は面白くなかつたですね(笑)。この本が議論の的になつたのは、一番最後の部分で、新入生

に手とり足とり、論文の書き方や発表の仕方を教えていることです。それまで東大の先生がやらなければならぬのかという議論が出たんですね。むしろそれだけに徹しているなら話はずれですが、大部分を占めているのは、第二部の認識の技術ですね。そこでは、東大の教養の先生が、映像論や表象文化論などのそれぞれの専門分野を出してきて、現代の新しい教養とはこういうものでなければならぬという問題意識に無理やりに継ぎ合わせた、そういう努力と苦勞の産物ですね。

ぼくの独断ですけど、集められた論文も玉石混交ですね。非常に優れたものと、そうでないものが入り交じっている。ある種のアカデミックな問題意識でこの本に接した場合には、さまざまな商品の並んでいるお店ということ、それなりに意味がある。つまり、学生がこれを読んで、どの先生の講座をとろうか、と選ぶんだっいたらいいわ

竹田 これ、昔の学者が書いたこういうものに比べると、意外と面白いと思いましたが。確かに学生も近づきやすいだろうな。だけどこれは『超勉強法』と同じで、行く先がない。ぼくがちょっと不穏だなど思うのは、論そのものとしては中には面白いものもあるけど、これではまず、教養とは何かということが全くわからない。これでは「面白おかしく書けば学問は成り立つ」という観念を与えてしまう。ぼくはそれに対し、批評家として言う。知や教養というものはそうではないと言わなければダメなんですよ。

ポストモダンには、知の体系がイデオロギーでかたまっていたのに対し、それを相対化する闘いをやった。その行き着く先がこれか、と。何のために学んでいるものがあるのか、人間はどういう理由で学をやるのか、なぜ思想が、文学があるのかという確信がどこにも

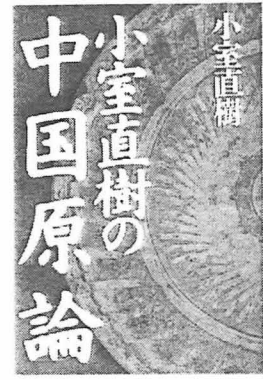
ない。根性もない。

小浜 もしかすると彼らには、新しい教養の体系をつくるという目的意識があつたのかもしれないけれど、現実に出てきてしまったものは違つた。さらに言えば、大学改革のポリシーのなさ

も、これに連動していると言えるでしょうね。

橋爪 大学があつて教養があるのか、教養があつて大学があるのかといえ、後者でなければおかしいのに、大学改革は、前者の考え方ですね。だけ

橋爪の推薦図書



『小室直樹の中国原論』(徳間書店)と、長谷川慶太郎・佐藤勝巳共著『北朝鮮崩壊と日本』(光文社)。小室さんの本は、中国はある意味での契約社会で、それを理解するには『史記』を読めばいい、という話ですね。『史記』の中に「刺客列伝」というものがある。刺客というのは、歴史書にこういう刺客がいたと一行書かれるために、自分の命を賭ける。それを

理解しなければ、中国のコネクション社会はわからない。逆に日本人にはそういう発想がないから、中国と付き合えば失敗する。これは読んでためになる本だと思います。というのも、そこには古典があるからです。『北朝鮮崩壊と日本』は、北朝鮮崩壊の現実性を論じている本で、これほどまで確度があるか、私には判断できないけれど、これによれば、朝鮮の崩壊は間近で、それが直接間接に日本に与える影響は大きなものがある。日本はそれに対して十分な理解もないし、心の準備もないという点はそのとおりですね。こういう本は、北朝鮮に限らず、いろいろ読むべきでしょうね。

ど、大学などあるうとなかろうと、教養というものはあるわけです。

歴史の波に洗われ、鍛えられ、そして多くの読者の選択を経てきた古典、読む時間に比して、そこから得られるものが極限的に大きい書物がある。そういうものを順番に読んで、最も効率的かつ体系的に、ほかの人の知的体系と匹敵するものを自分の中にこしらえて、あわよくばそれを超えていくきっかけも手に入れたい、そういうものが教養だとすれば、この本には、読むべきテキストというものが見えない。

読むべきテキストが解体したときに、とるべき授業というものが出てきた。その授業が面白ければいいし、先生が魅力的なら、なおよいということですね。それは結構なようだけど、そういう先生の個人的魅力とか教える技法を超えたところに、教養があるはずではないのか、と思うわけです。

小浜 小林さんにそういう批判はした

んですか(笑)。

橋爪 いえ。だから、いましました(笑)。でもそれは、彼らの責任ではないと思いますよ。強いて言えば、私たち全員の責任。

小浜 やって見たらこんなものしかできないという意味で？

橋爪 いや、できたものの中でこれが一番できがいいから売れているんですね。というか、これ以上のものをつくらなかったら、至難のわざでしょう。原理を変えないといけないから。

小浜 それは大問題だなあ。

観念の言葉で綴られた 古典的スノビズム

小浜 大江健三郎の『恢復する家族』ですが、非常に雑多な要素が入り込み過ぎていて、なぜこれが三〇万部も売れるのか、大江さんの言葉の力によつ

てそれだけの部数を獲得したとは到底思えない。それ以外の要素によって受けていると思われるわけです。

つまりそれは、彼がノーベル賞を受賞したこと、息子さんが知的な障害者で、かつ家族の努力によって作曲家として自立することができた、そういう苦心談が出てくること、それに、ゆかり夫人のさわやかなスケッチが入っている。それらが、道徳心と、知的なあこがれを満たしてくれる。

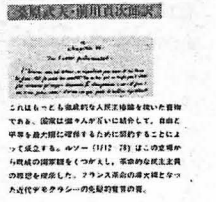
内容的には、光さんをめぐる苦勞話を描写しているところはかなりいいところがある。ところがそこに、イエーツやブレイクの詩の解釈が紛れ込んだり、国際会議へ行って外国の文学者と会ったという、日本人になじまない話が混入してくる。しかも、文体がごく翻訳調。結果としてごった煮の印象の本になっています。

彼は才能のある人だから、生き生きとした日常を書くのはうまいけど、そこある必要がある。しかし誠実過ぎて、もはやポーズになっている。素朴な19世紀の小説ならいざ知らず、現代小説としてそれをやると、そうしている私は果たして誠実なのかという問いを、常に自分に突きつけざるを得ない。結

竹田の推薦図書

ルソーの『社会契約論』(岩波文庫)。これは、社会というものに対する基本的な考え方を身につけるのにとってもいいので、学生にも大人にも薦めたい。最近、アメリカの社会学をいろいろ読んだのですが、哲学的な原理思考としては弱い。ルソーを読み直してみると、そこが強い。だけどそのルソーの原理的な強さはうまく理解されていないと思いますね。

ルソー 社会契約論



6233
岩波文庫

もう一つはプラトンの『クラテュロス』(プラトン全集) 岩波書店・第二巻所収)です。これはプラトンの言語論です。ソシユール以来の言語学では、言語とは全く恣意的なものであるというのが常識ですが、ここに登場するソクラテスは、それと全く逆の発想で、延々と言語の起源をたどっていく。その分析のプロセスが面白い。しかも一番最後に来て、言葉から世界の本質は知ることにはできない、世界の本質は人間の生活それ自体からしか知ることにはできないと、ズーッとやってきた言葉の学を全部捨ててしまふんです。困ったときには古典を読むことを、ぼくとしては薦めたい(笑)。

ここに日常性とは違う、非日常の観念の言葉をつむいでしまう。観念としての広島とか沖縄とかも盛んに出てくるけど、それがすべて、大江さんが言葉をつむぎ出すときの神の位置にある。その観念的な主題が前面に出て、家族を語ってもそうなってしまふことの中に、大江さんの問題を見ました。

橋爪 この本を読むと、作者が自身を円満な人間であると考えていない、という印象があります。そしてそれは自分のせいであると思っっているらしい。で、それがまず傷になっていますね。その傷を回復して癒されようということが、この本を通じて貫かれている主題で、しかしその傷は、隠されていますね。それはおそらく、誰かを拒絶した、あるいは拒絶されたという思いではないか。

印象的なエピソードとして、渋谷で光さんが迷子になった話があります。そこで繰り返されている反復強迫もや果として「私はこういう過ちを犯した」という告発が書き連ねられていて、読者はますます彼の癒しの物語に巻き込まれていく。これに素直に最後まで付き合うのは、ちょっと私にはできない。一体この読者はどういう人たかなのかな、と思っってしまうわけです。あとはもう文芸批評家にお任せするしかない(笑)。

竹田 いまの推理はぼくもまったく同感ですね。何が大江さんの傷になったかという、自分は故郷の四国から東京へ出てきて小説家になった。そのことが一生、倫理的な傷になっていると思っんです。自分が土着の根から離れ、そういうものをただ観察して書くだけの人間になったことに対して負い目がある。と同時に、四国と東京、あるいは圧政するものとされるもの、近代と土着というのをちゃんと記録して書くことは選ばれたことであるという、裏返し気持ちもある。



大江健三郎文・大江ゆかり画 『恢復する家族』 講談社 1600円 30万部

小浜 いわばプライドですね。竹田 そうです。自分のほうを一段下に見て、自分で自分の負い目をつくり出し、それを癒していく。けれど結局は、土着のものに価値を置くことによ

って、それを描く自分の仕事も聖化しているという構図、それがまさしく大江さんの全小説の嘗みですね。

小浜 それと、日本があんなに悪い恥ずかしい戦争をしてしまったという、全日本国民の負い目意識と自分を重ね合わせて、すべての日本人は自分と同じように感じているはずであるという、そこが彼の妄想の広がり具合だと思えますね。

竹田 『恢復する家族』は、一言で言

うと、自分が苦しみを抱えていることを聖化するものなんです。

小浜 うん、わかります。具体的にそういう場面がいっぱいある。

竹田 その聖化のやり方が、小浜さんが言われたように、日常の言葉ではない。文学と芸術の世界によって聖化している。

小浜 いや、それを文学と言ってしまうのは、文学が泣く。

竹田 ええ、いや、そうなんです。ちょっと待っててくださいね。この本の文学と芸術の世界は、スノビズム。

竹田 そう、スノビズム。

竹田 つまり、文学や芸術の世界というのは、ありがたいものだ、ということなんです。だから日常の言葉がなくて、有名なピアニストや、ノーベル賞作家が出てきて、みんな苦しみ合

化するものだという、一種の倒錯がある。だけどそれは、日常の人間のリアリティから、どんどんかけ離れていく、あるいは対立するようなかたちまでなるわけですよ。

文学や芸術を立派なものだというのは、ぼくはこれは、文学として頹廢した形態だと考えるわけです。この本はそれが非常によく表れていますね。

竹田 同じスノビズムでも、『知の技法』は、スノビズムのいやらしさを十分知っている。大江さんはそれがわからないスノビズム。『知の技法』と大江さんの間には一〇年から十数年のギャップがあると思いますね。

小浜 『知の技法』は確信犯で、大江さんはナイーブですね。

竹田 これは古典的なスノビズムで、苦惱するタイプですね。『知の技法』は苦悩しないスノビズム(笑)。

小浜 結果的に、苦行僧のポーズだけが売り物になってしまってますね。

大学院に進修する社会人が増えている。そのためのガイドブックも多数出版され、予備校も新設されるなど、ちょっとした勉強ブーム。会社の仕事や同僚と一杯やる時間をやりくりして勤務後や土曜日に授業に駆つけける社会人は、大学院に何を求めて、何を自問しているのだろうか。現代思想を踏まえて、社会状況に対する発言も多い東京工業大学教授の橋爪大三郎さんと、実際の授業を、参観してもらった。

何を求めて 学び続ける 社会人の大学院ブーム



橋爪大三郎さんと行く

授業に参加した(中央)で討論した(左)橋爪大三郎さん。右は筆者(東京工業大学)

職場でより専門的な仕事を◆会社以外の世界を持ちたい

目的意識ハッキリ

先週の土曜日、十六日午前十一時、東京の青山通りに面した青山学院大学の二四六〇五番教室は張り詰めた空気に満ちていた。国際政治経済学

生に「修士を取った後、会社に復帰するつもりですか、それとも他の企業に移ったり、新しい仕事を始めるつもりですか」と質問した。三十歳の公務員の男性は、「職場には戻るつもり」。四十四歳の海外コンサルタンの男性の答えも同じ。「現在

教師としたら教えがいがあるでしょうね

●入学者数四倍に
大学院修士課程への社会人入学者数は、一九八七年度が八百十五人だったが、昨年度は三千四百二十人と四・二倍になった。それに合わせて

生活探検

またま低水準だ。この背景には日本の企業内教育が充実していることが一因として挙げられるが、急速な技術革新や知識の陳腐化が進み、企業だけでは対応しきれない状況が背景にある。